

<30-04>

課題名	需要に応じた水田農業の推進	ものづくり・ 販路づくり	中丹東農業改良普及センター 中丹西農業改良普及センター
(1) 普及指導事項（評価対象） 需要に応じた「京の輝き」の生産安定化		(2) 普及指導対象 「京の輝き」大規模生産者のうち生産が低迷している10戸	
(3) 活動内容と成果 ガス障害による初期生育不良、幼穂形成期の肥効不足による1穂もみ数の減少が低収の主要因ととらえ、重点的に対策を指導した。 水管理の指導（土壌還元化対策）及び省力的な追肥技術の導入のため、現地見学を中心とした研修会を実施するとともに、技術情報を発行した結果、重点支援対象者を中心に土壌還元化対策の重要性が認識され、対策が実施されるようになった。また、同時に指導を行った省力的な追肥法は生産者にとって受け入れやすく、取り組みが4事例あった。			
(4) コメント		(5) 普及指導計画への反映状況、今後の活動等	
② 還元化対策が認識され、何%で対策が実施されたか。また、省力追肥法の効果がどのくらいあったのか。補足説明を。 取引先(?)の酒造組合の動きをもっと身近に伝えてみてはどうか。		② 土壌還元化対策は、重点対象者の50%が実施しました。 省力追肥法については、処理に要する時間及び労働負荷において、従来の動力散布機使用に比べて大幅な省力効果が得られるとともに、同等の収量が得られました。 酒米生産者と酒造メーカーの交流は平成30年度に行い、相互理解を深めることにより、生産意欲の向上につながりました。今後とも酒米生産に生かせるように、意見交換の機会を設けるなどの検討を進めて参ります。	
③ 秋冬期の管理と追肥による効果を、反収などの数字で表せないか。		③ 土壌還元化対策による効果は、令和2年度に秋期の稲わらのすき込みによる効果検証を行い、その結果を生産者に示し、秋冬期管理の重要性を指導します。 また、現地試験では追肥により約20%の増収がみられましたので、随時、生産者への技術指導に生かします。	

<p>④ これまでの実績をもとに次年度改善できるよう早い段階で計画を作成し、すべての農家にもっと指導を行い、農家の技術向上及び産地としての収量アップを目指してもらいたい。産地の生産目標に近づいたことで個々の生産者の目標達成意欲の希薄化に繋がるのが懸念される。個別に技術対策の状況と収量との関係性を分析し、肥培管理等の点検をするような仕組みが必要かと思うが、いかがか。</p> <p>近年は夏場の気温変動が大きく、計算通りの肥効が得られるか疑問がある。調査資料は無いか。技術の励行の点で問題がないのか、たとえばシグモイド型被覆肥料の選択と施用量などを確認されたい。さらに、念のため、減水深が還元化に関係していないか確認が必要と思うが、いかがか。</p>	<p>④ 収量目標達成に向け、秋期の稲わらすき込みによる腐熟化促進など、技術面からの指導を継続し、生産者が目標達成意欲を持続するよう支援を行います。</p> <p>肥効については、メーカーの提示以外に肥料の溶出の資料はないものの、毎年研究機関で把握されている収量に大きな変動がないため、肥効面での問題はあったとしても小さいと考えられます。このことから、当地域での減収は土壤の還元化により根部が障害を受けたために、溶出した窒素が吸収できない状態になっている可能性が高いと考えています。減水深は研究所の協力が得られれば令和2年度に実施する調査で測定します。</p>
<p>⑤ 新たな技術課題には、研究機関との連携による速やかな課題解決をお願いします。</p>	<p>⑤ 普及センター単独では解決が難しい要因も想定されるため、試験研究機関と現地普及センターが連携して課題を解決していくタスクチーム活動として解決を図るべく、要望を上げています。</p>
<p>⑥ 中丹米ブランド化に向けた取り組みを期待する。今後の取組として中丹地域で収穫された酒米でのお酒を地域の特産物としてPRを広く展開していくと良いと思う。</p>	<p>⑥ 主食用米については、プレミアム米コンテスト上位入賞結果を基に、継続して高品質な中丹米を、JA等と連携しながらPRしていきたいと考えています。</p> <p>中丹産の「京の輝き」に加えて、その他酒米についても契約数量を確保し、100%京都産の酒米で造ったお酒のPRを、関係機関と連携しながら検討していきたいと考えます。</p>